

# 南京・丹陽南朝陵墓有角石獸調査報告（１）

山 本 謙 治

## I 南朝陵墓と石獸

南朝陵墓は南京市周辺とその東約90kmに位置する丹陽市周辺に分布する。現在報告されている南朝陵墓は、南京市周辺に27ヶ所、丹陽市周辺に13ヶ所の総計40ヶ所である。このうち神門石刻が残存しているのは、郡厚本主編『江蘇考古五十年』によると34ヶ所ある<sup>1)</sup>。この34ヶ所のうち、石獸が現存ないし記録されていた陵墓は、南京市13ヶ所、丹陽市11ヶ所、句容市1ヶ所、江寧県1ヶ所の計26ヶ所となる（表1参照）。

石獸は参道入口に道を挟んで左右両側に一体ずつ向き合って配されるが、墓から見て右側を右石獸、左側を左石獸と呼び習わされている。その形態は頭部に角をもつ有角獸と、角をもたず鬣をつくる無角獸に大別される。有角獸の角は右石獸が1本、左石獸が2本で、有角獸は皇帝陵に、無角獸は王侯墓に置かれたとするのが定説となっている。石獸の名称に関しては、皇帝陵に置かれる有角有鬣の石獸を〈麒麟〉、王侯墓に置かれる無角無鬣を〈辟邪・獅子〉、さらに有角の〈麒麟〉については独角石獸を〈麒麟〉、双角石獸を〈天禄〉と呼び分ける説などがあり定まっていない<sup>2)</sup>。本稿では、便宜上、単に〈有角獸・無角獸〉とのみ呼び分ける。

石獸の現存総数は無角獸が15ヶ所28体、有角獸が11ヶ所20体の計48体である。その分布状況は南京市に無角獸11ヶ所20体、有角獸2ヶ所4体、丹陽市に無角獸2ヶ所4体、有角獸9ヶ所16体、句容市に無角獸1ヶ所2体、江寧県に無角獸1ヶ所2体となる。以上26ヶ所のうち、南

京市無角獸3ヶ所、江寧県無角獸1ヶ所を除く22ヶ所の石獸石彫に対して、筆者は2004～5年度に現地調査を行う機会を得た<sup>3)</sup>。

南朝陵墓石獸に関しては、わが国では、町田章「南齊帝陵考」（『文化財論叢』、同朋舎、1983年）、曾布川寛「南朝帝陵の石獸と磚画」（『東方学報』第63冊、京都大学人文科学研究所、1991年、『中国美術の図像と様式』所収、中央公論美術出版、2006年）、岡林孝作「南朝皇帝陵の再検討―石獸の編年を中心に―」（『檀原考古学研究所論集』第14、八木書店、2003年）などの研究があり、図版としては奈良県立檀原考古学研究所編『南朝石刻』（檀原考古学協会、2002）があるが、造形的な判断を行うには、石獸細部の報告や写真が十分だとはいえない。そこで本稿では有角獸11ヶ所20体に対して、写真資料の提示とともに、造形的な考察に必要な基礎報告をおこなっておく。

各石獸は陵墓名を冠して呼ばれることが多いが、石獸が属する陵墓の比定に関しては諸説があり確定されていないので（参考文献参照）、ここでは陵墓名を避けて所在地名を冠して石獸を呼ぶ。ただし、有角獸の所在する陵墓では、南京麒麟鋪の宋武帝〈初寧陵〉と丹陽三城巷の梁文帝〈建陵〉の比定は定説としてよいので、この2陵については陵墓名で呼ぶことにする。また丹陽の三城巷に南北に並ぶ4陵石獸については、建陵を除く3陵石獸を、便宜的に北より、三城巷北石獸（莊陵）、三城巷石獸（修陵）、三城巷南石獸（興安陵）と呼ぶ。括弧内は従来慣用的に呼ばれてきた陵墓名である。各石獸の所在地、従来の比定陵墓名などは表1に示す。

- 1) 郡厚本主編『江蘇考古五十年』南京出版社, 2000年, 286-289ページ, 「江蘇現存南朝陵墓神道石刻表」287ページ。
- 2) 石獸の名称に関しては, 曾布川寛「南朝帝陵の石獸と磚画」(『東方学報』第63冊, 京都大学人文科学研究所, 1991年, 『中国美術の図像と様式』所収, 中央公論美術出版, 2006年)を参照。
- 3) 現地調査を行った22ヶ所のうち, 南京市江寧区淳化鎮劉家辺の「梁建安敏侯蕭正立墓」は2体とも完全に水没しており, 南京市江寧区仙鶴門外張庫村の「梁臨川靖惠王蕭宏墓」は周辺の開発が著しく, 石柱の場所までは行けるが, 石獸の周辺は水没の状態で調査は不可能であった。

Ⅱ 有角獸の系統分類と造形比率

有角獸は南京市に2ヶ所4体, 丹陽市に9ヶ所16体の計11ヶ所20体が現存する。これら20体は, プロポーシオン・翼形式・体表装飾(体毛表現)・動勢表現などの形態的特徴から大きく以下の2種類に分けることができる(括弧内は従来慣用されてきた陵墓名)。

- ④グループ有角獸 計10体
  - ①初寧陵左右石獸2体
  - ②獅子衝(長寧陵)左右石獸2体
  - ③陵口左右石獸2体
  - ④三城巷北(莊陵)左右石獸1体
  - ⑤三城巷(修陵)左右石獸1体
  - ⑥三城巷南(興安陵)左右石獸2体

- ⑤グループ有角獸 計10体
  - ①前艾廟(景安陵)左右石獸2体
  - ②建陵左右石獸2体
  - ③獅子湾(永安陵)左右石獸2体
  - ④仙塘湾(修安陵)左右石獸2体
  - ⑤金家村(宝卷墓)左右石獸2体

本稿は個別有角石獸の基礎調査報告が目的であるため, これら系統分類の造形的根拠については別稿をなす<sup>4)</sup>。ただ有角獸の個別報告をするにあたって, その報告順序を, 所在地や定説のない比定陵墓の時代順に基づいておこなうことは意味が見出せないのので, 本稿では上記の系統分類に従って順次記述することにする。

また本報告ではプロポーシオン(体全体における各部分の造形割合)に関しては造形比率に

表1 南朝陵墓石獸一覽表

	現在の比定陵墓名	地名	所在地	石獸			参考書籍図版番号			調査地
				種別	現存数	左	右	南朝石刻	六朝芸術	
1	宋文帝劉義隆長寧陵	獅子衝	南京市棲霞区棲霞鎮新合村獅子衝	有角獸	2	○	○	03-05	104-114	○
2	宋武帝劉裕初寧陵	麒麟鋪	南京市江寧区麒麟門麒麟鋪村	有角獸	2	○	○	01-02	1-3	○
3	齊景帝蕭道生修安陵	仙塘湾	丹陽市埭城鎮水經山南仙塘湾附近鶴仙坳	有角獸	2	○	○	11-13	18-27	○
4	陵口	陵口	丹陽市陵口鎮東	有角獸	2	○	○	61-62	124-127	○
5	齊武帝蕭暕景安陵	前艾廟	丹陽市前艾鄉田家村	有角獸	2	○	○	09-10	10-17	○
6	齊宣帝蕭承之永安陵	獅子湾	丹陽市胡橋鄉(張莊村)獅子湾	有角獸	2	○	○	06-07	4-9	○
7	齊廢帝東昏侯蕭宝卷墓	金家村	丹陽市建山鄉金王陳村	有角獸	2	○	○	17	128-132	○
8	梁武帝蕭衍修陵	三城巷	丹陽市荊林鎮三城巷劉家村	有角獸	1	○		55	41-49	○
9	梁簡文帝蕭綱莊陵	三城巷	丹陽市荊林鎮三城巷劉家村	有角獸	1	○		56		○
10	梁文帝蕭順之建陵	三城巷	丹陽市荊林鎮三城巷東北	有角獸	2	○	○	19-22	32-40	○
11	齊明帝蕭鸞興安陵	三城巷	丹陽市荊林鎮三城巷東北	有角獸	2	○	○	16	28-31	○
12	梁桂陽王蕭融墓	張家庫	南京市棲霞区棲霞鎮張家庫	無角獸	2	○	○	23-25	115	○
13	梁安成康王蕭秀墓	甘家巷	南京市棲霞区棲霞鎮甘家巷	無角獸	2	○	○	26-31	58-70	○
14	梁始興忠武王蕭憺墓	甘家巷	南京市棲霞区棲霞鎮甘家巷	無角獸	2	○	○	32	74-77	○
15	梁鄱陽忠烈王蕭恢墓	甘家巷	南京市棲霞区棲霞鎮甘家巷	無角獸	2	○	○	44-45	71-73	○
16	梁吳平忠侯蕭景墓	十月村	南京市棲霞区堯化門十月村	無角獸	2	○	○	33-35	78-83	○
17	陳武帝陳霸先萬安陵	石馬衝	南京市江寧区上坊鄉石馬衝	無角獸	2	○	○	57-58	99-103	○
18	齊前廢帝鬱林王蕭昭業墓	水經山村	丹陽市埭城鎮(巨竹村)水經山村	無角獸	2	○	○	14	136-139	○
19	齊後廢帝海陵王蕭昭文墓	爛石壩	丹陽市建山鄉爛石壩北	無角獸	2	○	○	15	133-135	○
20	梁南康簡王蕭績墓	石獅村	句容市石獅鄉石獅村	無角獸	2	○	○	46-51	84-90	○
21	梁臨川靖惠王蕭宏墓	張庫村	南京市江寧区仙鶴門外張庫村	無角獸	2	○	○	36-43	50-57	△
22	梁建安敏侯蕭正立墓	劉家辺	南京市江寧区淳化鎮劉家辺	無角獸	2	○	○	53-54	91-97	△
23	獅子壩村失名墓		南京市棲霞区馬群鎮獅子壩村	無角獸	1					
24	侯村失名南朝墓		南京市江寧区上坊鄉陵里侯村	無角獸	2	○	○	60	121-123	
25	太平村失名墓		南京市燕子磯鎮太平村(現南京博物院)	無角獸	1					
26	方旗廟失名墓		江寧県江寧鎮建中村方旗廟	無角獸	2	○	○		117-119	

樞原考古学研究所編『南朝石刻』樞原考古学協会, 2002年  
姚遷・古兵『六朝芸術』文物出版社, 1981年

に基づいて記述する。造形比率とは頭体各部分の縦横の比率を、基準値を100として示したものである。縦比では頭部最上端（頭頂）より体部最下端（胸下）までを基準値100とし、横比では体部最前端（胸前）より体部最後端（尻奥）までを基準値100とする<sup>5)</sup>。

- 4）山本謙治・来村多加史『魏晋南北朝時代の環東海地域における南朝文化伝播の諸相と伝播経路に関する基礎研究』（平成16～17年度科学研究費補助金基盤研究C報告書、2006年）
- 5）縦比については、現状では角が破損したものが多いため、角を除いた部分を頭部の最上端（頭頂）とし、脚部は破損や修復されたものが多いので除外し、体部の最下端（胸下）までをもって基準とする。脚部については修復脚も含めて参考までに比率を示しておく。横比については、体部の最後端は尾の部分であるが、尾は尻より下方に垂れるものと、尻より後方に造り出されるものがあり、尾の部分の基準にした造形比率によって両者を比較することは適当ではないので、臀部の最後端までをもって基準とする。

縦比の算出基点は、前身では、上より（頭頂・顎下・頸下・胸下）の4点、後身では、上より（腰上・背上・腰下・胸下）の4点とした。（頭頂）は角を除外した頭部最上端、（顎下）は下顎と髭の境、（頸下）は頸後の曲線が背中へと曲がる個所、（胸下）は体部の最下端であるが、石獸によっては腹下というほうが適当なものもある。（腰上）は後身の最上端、（背上）は頸下から下がって腰上にいたる曲線の最下端、（腰下）は後脚の股間の部分で生殖器の付け根の個所にあたるが、写真では後脚の陰となるのでおよそその個所を示す。

横比の算出基点は、頭部では、前より（顎前・面奥）の2点、体部では、前より（翼前・頸奥・翼奥・後脚前・尻奥）の5点とした。（顎前）は上下顎のいずれか前方にある個所、（面奥）は角を除いた頭部の最後端、（翼前）は肩にあたる前脚最前端の個所、（頸奥）は頸後の曲線が背中へと曲がる縦比の（頸下）と等しい。（翼奥）は羽の最後端の個所、（後脚前）は大腿部の最前端、（尻奥）は尾を除いた臀部の最後端である。

表 2 南朝陵墓有角石獸造形比率一覧

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
		面長	顎長	頭部高（1＋2）	胸高					胸高（7＋8）	腰高（6＋7）	
	高さ	頭頂－顎下	顎下－頸下	頭頂－頸下	頸下－胸下	頭頂－腰上	腰上－背上	背上－腰下	腰下－胸下	背上－胸下	腰上－腰下	脚高
㊤グループ	初寧陵右石獸	31	17	48	52	43	8	42	7	49	50	17
	初寧陵左石獸	30	21	51	49	52	4	37	7	44	41	
	獅子衛右石獸	41	12	53	47	46	11	32	11	43	43	
	三城巷南右石獸	39	14	53	47	46	11	31	12	43	42	
	陵口右石獸	39	15	54	46	47	10	33	10	43	43	
	三城巷右石獸	36	23	59	41	53	10	25	12	37	35	14
㊤グループ	獅子灣左石獸	33	24	57	43	48	12	24	16	40	36	12
	前艾廟左石獸	31	27	58	42	49	14	22	15	37	36	11
	建陵右石獸	31	27	58	42	55	8	25	12	37	33	18
	仙塘灣左石獸	32	27	59	41	53	8	29	10	39	37	16
	金家村右石獸	38	27	65	35	57	9	23	9	32	32	20

		11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
		面幅	面幅	11＋12		前半身	後半身		翼幅		
	長さ	胸前－顎前	顎前－面奥	胸前－面奥	面奥－尻奥	胸前－頸奥	頸奥－尻奥	胸前－翼前	翼前－翼後	翼後－後脚前	後脚前－尻奥
㊤グループ	初寧陵右石獸	12	32	44	56	41	59	2	42	12	44
	初寧陵左石獸	20	36	56	44	45	55	5	50	11	34
	獅子衛右石獸	11	37	48	52	36	64	6	41	11	42
	三城巷南右石獸	9	36	45	55	36	64	7	47	6	40
	陵口右石獸	9	37	46	54	37	63	4	44	11	41
	三城巷右石獸	7	39	46	54	39	61	7	45	8	40
㊤グループ	獅子灣左石獸	14	35	49	51	39	61	3	45	10	42
	前艾廟左石獸	6	35	41	59	35	65	4	43	9	44
	建陵右石獸	12	32	44	56	34	66	8	43	11	38
	仙塘灣左石獸	23	29	52	48	39	61	5	43	11	41
	金家村右石獸	20	32	52	48	37	63	4	43	6	47

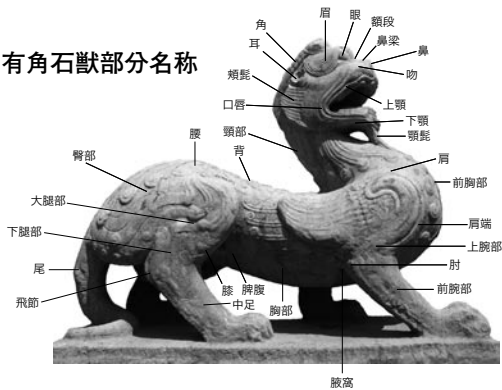
Ⅲ 南朝陵墓有角石獸各説

1. 初寧陵右石獸

1) 体軀（プロポーション）〔図1-1・2・3・4〕

体長3.18m、高さ2.56m（以下、石獸の寸法に関しては曾布川前掲論文記載数値による）。初寧陵石獸のプロポーションについては、「頭が大きくて頸が短いプロポーションをとる。全体の感じは重厚にして素朴」(町田章前掲論文)、「全体として太りじしのずんぐりした体軀をなし、首は太く短く、胴体は円筒形のように太く丸く、四肢も太くがっしりしている」「素朴で鈍重な感じ」(曾布川寛前掲論文) というような指摘が一般的である。

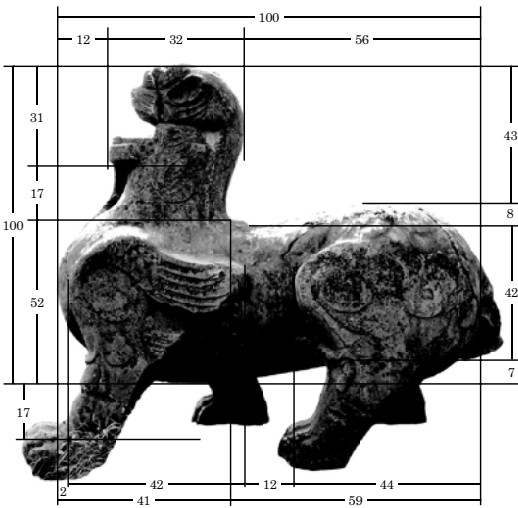
しかしながら頭部の大きさを造形比率（表2参照）にすると、①面長〈頭頂―顎下〉は右石獸31、左石獸30であり、この比率は他の④グループ石獸4体の36～41に比べれば最小である。また⑫面幅〈顎前―面奥〉も右石獸32、左石獸36であり、他の4石獸が36～39あるのに比べれば最も小さな割合となる。さらに頸の造形比率も、②〈顎下―頸下〉は獅子衝・三城巷南・陵口が12～15であるのに対して、初寧陵は右石獸17、左石獸21と他の石獸よりはむしろ長くなっているのが事実である。このように実際の造形比率と観察感が異なるのは、初寧陵石獸の全体がひとつの塊のように印象されるからであろう。石獸は頭部が頭と頸、体部が胸部・胴部・臀部の各部分からなるが、初寧陵ではそれら各部分が十分に分化しておらず、四脚獸として有



機的に結合されていない。

造形比率でいえば、胸部・胴部・臀部の区分は⑥〈腰上―背上〉⑧〈腰下―胸下〉⑦〈背上一腰下〉に表れる。⑥〈腰上―背上〉は背中から腰への高まり、⑧〈腰下―胸下〉は腹部の絞まりであり、これらによって体部の減り張りと動きが表される。初寧陵石獸の場合、⑥〈腰上―背上〉が他石獸4体（10～11）に対して、左石獸4、右石獸8であり、⑧〈腰下―胸下〉は他石獸4体（10～12）に対して、左右石獸7といずれも小さい。したがってその小さい分だけ胸部・胴部・臀部の区分が不明瞭となり、逆に胴体の太さ⑦〈背上一腰下〉が他石獸4体（25～33）に対して左石獸37、右石獸42と大きくなり、体部は寸胴にみえることになる。

こうした造形比率のうえに、さらに頸部も上下に細い太いが無い円筒形であるため、頭部と体部は単に積み上げられた印象となり、全体が未分化の塊である印象が強くなる。このような頭体部の加算的な造形性は、彫塑芸術では原初的なものと考えられる。また初寧陵石獸の場合、各部の造形比率が、左右石獸において異なる数値が多く一定しないことも、こうした石獸の形式がいまだに定型化していないということを示すものと考えてよいであろう。



初寧陵右石獸造形比率

## 2) 頭部〔図1-5・6・7・8〕

正面やや上方を向いて口を開く。角は1本で、完全に破損し痕跡を残すのみ。右側面は上顎・目・耳を破損。頬鬚の一部欠損。左側面は上顎先端を欠損するが、目・眉・耳は残存する。頭頂部など部分的にセメントで補修される。

### (1)角〔図1-5〕

角は完全に破損しているが、頭頂から後頭部まで痕跡が連続して残る。

### (2)目〔図1-6〕

〈左目〉は球形であるが、内側と上顎側を直角の二重線で区切るため、1/4の球形となる。瞼や瞳はなく、眼球のみがむき出され、上部から側面にかけてこれを眉が覆う。〈右目〉は破損する。

### (3)眉〔図1-7・8〕

〈左眉〉は眼球の上部と左側面を包み、わずかな弧を描いて後方の耳の上にまでのびる。中央部が縦に欠損、先端も欠損するため全体の輪郭は正確には判別し難い。表面には数条の並行線を刻むが、これも表面の風化で明瞭ではない。〈右眉〉は完全に破損する。

### (4)耳〔図1-7・8〕

〈左耳〉は後方に30度程度倒した楕円形で、内部を彫り窪める。付け根下方の輪郭部のみ二段に彫出す。耳介内には刻線なし。先端の一部を欠損する。〈右耳〉は破損する。

### (5)口吻

#### (a)鼻〔図1-6〕

上顎から鼻は破損する。

#### (b)口唇〔図1-6・7・8〕

〈上顎口唇〉は左側面の付け根のみわずかに残り、他は欠損する。〈下顎口唇〉は左側面の付け根のみわずかに欠損し、他は完存する。上下顎の口唇がひとつに繋がっていたかどうかは明瞭ではないが、《左石獸》では連続している。〈下顎口唇〉には3本の刻線を施す。

#### (c)歯〔図1-6〕

〈下顎〉口内の門歯は4本、その両端に太い牙を1本ずつ彫るが、いずれも先端が欠損し付





図1-5



図1-6



図1-7



図1-8



図1-9

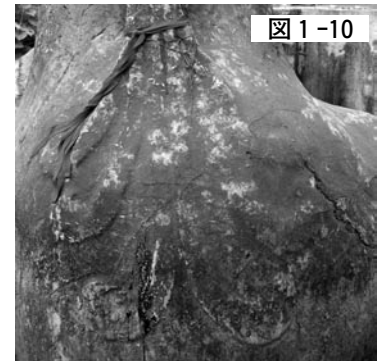


図1-10

け根部分のみが残る。門歯と牙にはわずかに歯茎を線刻する。門歯の上には舌が乗せられる。舌先の先端は口から垂れるのではなく、口内におさまる。左右の白歯は牙から口奥までひと続きで彫られ、一枚ずつを区分する刻線は施されない。〈上顎〉の歯はすべて破損する。

#### (6) 頬髭〔図1-7・8〕

〈右頬髭〉は口唇の後方に6枚段彫りされる。その下端は下顎の付け根から発し、上端は欠損する。先端は下顎付け根よりほぼ45度で後頭部に向かう。段彫りの刻線は並行線ではなく先端に集束する。〈左頬髭〉も同様であるが、中央で横に亀裂が入る。頬髭の上部輪郭は〈左耳〉下の輪郭部と接し、頬髭と耳の先端は一致する。

#### (7) 顎髭〔図1-9・10〕

下顎前面下部から門歯4枚の幅で逆三角形に

のび、喉元との間を彫り抜かれ、前胸部にいたって、3段6条に分かれて広がる。髭は5本の带状。

#### (8) 頭部体毛

頭部に体表装飾は確認できない。

#### 3) 頸部〔図1-7・8〕

〈右頸側〉には2本の体毛を平彫りする。ともに毛筋は刻まない。①は小さく短めで、頬髭の下から頸側中央辺りまでのびる。付け根部分は太く、次第に細くなり、先端は前方向に反転して半C字形をなす。いま1本の②は、頬髭の後方、後頭部よりのびるものであるが、どこから発するかは風化のため判然としない。形は頬髭の下から発するものと同形であるが、それよりも大きく、頸側中央よりも下方にまでのびる。

〈左頸側〉には頬髭の下からのびる①のみが

彫られ、②は見られない。さらに①も〈右頸側〉では先端が前方に反転していたのに対し、〈左頸側〉では後ろ向きに反転する。

#### 4) 前胸部〔図1-10〕

下顎中央からのびてきた顎髭が上下3段左右6条に分かれて広がる。全体に風化のため輪郭は判然としないが、平彫りで毛筋は刻まない。上下3段はいずれも左右対称で、上段より下段にいたるにしたがい短くなる。左右6本の体毛は同形で、付け根から同じ太さでのび、先端は上方に反転し半C字形をなす。

#### 5) 脚部〔図1-11・12・13・14〕

前後脚ともに左脚を前に踏み出す。四脚ともつま先を地面につけ、指は5本、先端は爪のように尖らせる。中指を一番高くして、左右2本を順次低くしていく。

〈右前脚〉は前腕の前方部、上腕部からの体毛が前方に反転した下に楕円形の窪みをつくり、その中に上下3段の膨らみをつくる。〈左前脚〉は同位置に楕円形の膨らみをつくる。中央には横に亀裂がはいる。〈左右後脚〉は下腿部の前側に楕円形の窪みのみをつくる。

〈右前脚〉では、くの字形の肘を上下に包んで三角形の長毛がでる。先端はやや上方にはねる。5枚羽の段彫りで、毛筋は先端に集束する。〈左前脚〉では、くの字形の肘の上部に三角形の長毛をおく。先端ははねず、上部輪郭は水平となる。5枚羽の段彫りであるが、毛筋は並行線をなす。〈左右後脚〉では、くの字型の飛節の上部に小さな長毛が申し訳程度に彫られる。4枚ほどの段彫りで、先端はわずかに上方に上がり、毛筋はやや集束する。

#### 6) 上腕部〔図1-15・16〕

〈右上腕部〉では、幅広い帯状の体毛が肩端部輪郭を覆って前脚付け根までのび（①）、その先端は2つに分岐する。ひとつは前方に短く反り返り（②）、いまひとつは体側に沿って後方へと分岐する（③）。また肩端輪郭を覆う体毛①は、途中から上腕部のなかに向かって一本分岐する（④）。これらの体毛は平彫りで、毛筋をまったく刻まない。分岐した③④の先端は



図1-11



図1-12

図1-13

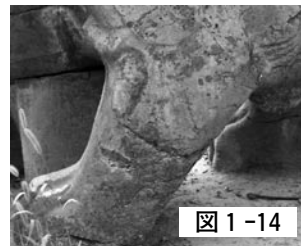


図1-14

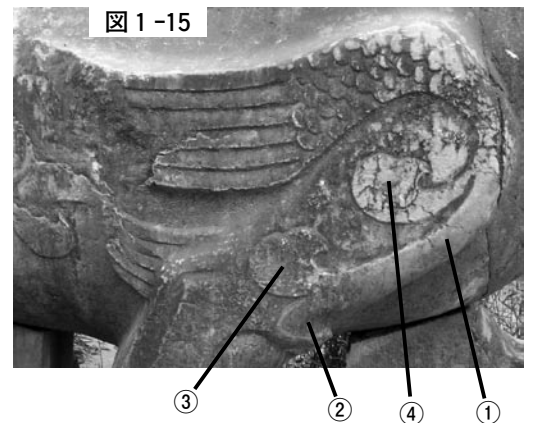


図1-15

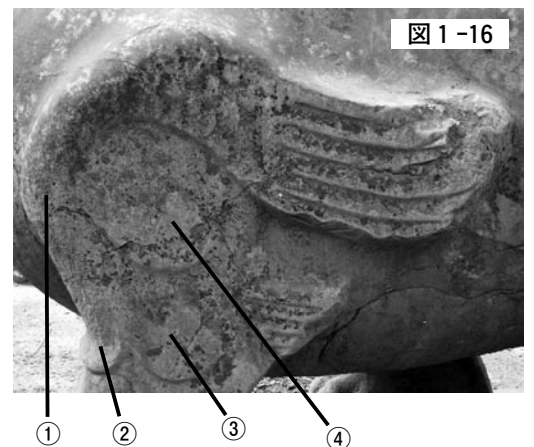


図1-16

丸く広がり、上部にひとつ切れ込みをいれ、その先を前方に向かって半C字形に小さく反転させる。

〈左上腕部〉の体毛構成も同様であるが、③④の輪郭が風化のために判然としない。

#### 7) 翼〔図1-15・16〕

〈右翼〉の基部は肩口で上腕部体毛①につながる。基部は半円形を魚鱗のように交互に3～4枚、後方へと11列並べる。羽は11列目より後方に水平にのび、羽の上部、下部の輪郭は曲線を描かない。羽は6枚の段彫りで、各段の稜線は並行線で、先端へと集束しない。先端は欠損する。

〈左翼〉も同形であるが、風化のため基部の半円形が何列並ぶかは判然としない。羽の上下輪郭は、〈右翼〉が水平であるのに対して、肩口からいったん下がり、弧を描いて先端を上方にあげる。羽の先端部分は上層を欠損する。羽の先はほぼ45度で下より上に切り上げる。

#### 8) 腹部〔図1-17・18・19〕

〈右側腹〉には羽下が上方にカーブするところより下腹に向かって発した体毛①と、背中よ

り下向きにのびてきた体毛②の2本が見られる。①は長毛後方に位置し、先端は正面方向に反転して半C字形となる。②は翼先端と大腿部の間に位置し、先端は①の斜め上に接して正面方向に反転して半C字形をつくる。いずれも平彫りで毛筋は刻まず、付け根が幅広で、先にいくほど細くなっていく。ともに付け根部分の輪郭は風化して判然としない。

〈左側腹〉も〈右側腹〉①②の体毛をつくるが、②は風化してほとんど輪郭を判別できない。①は〈右側腹〉と異なり、付け根は三角形に広がらず細長い。先端の反転部分は表層を欠損し、わずかに輪郭を残すのみである。

下腹には性器(陰囊・陰茎)をつくる。

#### 9) 背部

風化のため明確ではないが、わずかに体毛の痕跡はうかがわれる。

#### 10) 大腿部〔図1-20・21〕

〈左大腿部〉の表面は風化のために判別しにくいだが、輪郭部を幅広い帯状体毛で覆い(①)、その下端は下腿部で、ひとは前方に短く反り返り(②)、いまひとは体側に沿って後方へ



図1-17

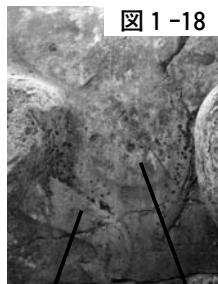


図1-18

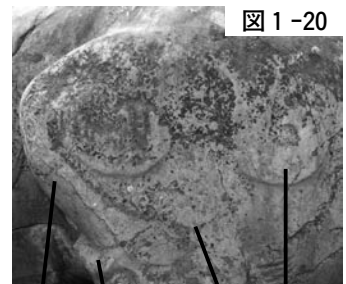


図1-20



図1-19



図1-21



図1-22



と分岐する（③）ようである。③はすぐに反転して半Ｃ字形をなす。①の上端は臀部との境目下方に垂れて、毛先は上方に向いて半回転する（④）。どちらも平彫りで、毛筋は刻まれていない。③と④の間の大腿部中央にいま１本の体毛が半Ｃ字形をつくるようであるが、風化のため判然としない。

〈右大腿部〉は角張りがなく横に丸い。体毛は風化のため確認できない。

#### 11) 臀部〔図１-22〕

〈左右臀部〉とも体毛の痕跡は見られるが、風化のため確認できない。

#### 12) 尾〔図１-22〕

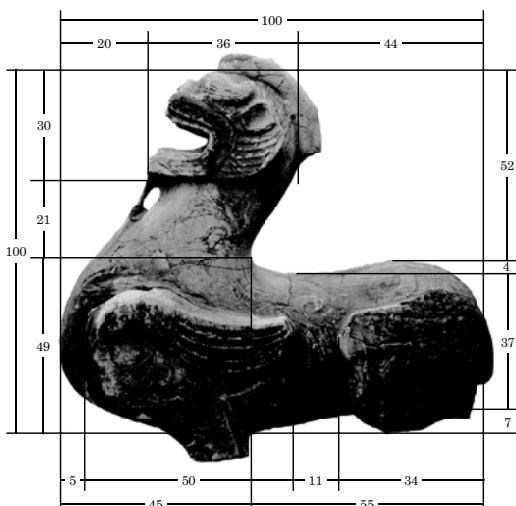
尾は臀部の付け根部分わずかなところから欠損する。台座には尾の接地部分と、それを右回りにひと巻きする尾先が残る。

### ２．初寧陵左石獸

#### 1) 体軀（プロポーション）〔図２-1・2・3・4〕

体長2.96m 高さ2.80m。現存する有角獸において、左右石獸を比べた時、最もプロポーションの相違が大きいのが初寧陵石獸である。一見して目立つのは、頸が長く、頸を後に倒す角度が大きいことである。造形比率（表２参照）で比較すると、②頸長〈顎下一顎下〉は右石獸：左石獸＝17：21程度の差違で、さほど頸が

長いわけではないが、⑪〈胸前—頸前〉が右石獸：左石獸＝12：20と差違が大きいので、頸を後方に引くことで、より頸の長さが強調される結果となっている。また⑤〈頭頂—腰上〉が右石獸：左石獸＝43：52であるため、左石獸の方が頸後の空間が大きく空き、より頸が高く印象されることになる。さらに⑩〈腰上—腰下〉が右石獸：左石獸＝50：41、⑳〈後脚前—尻奥〉が右石獸：左石獸＝44：34と、右石獸の下半身（大腿部と臀部）に比べて、左石獸の下半身の方が一割方小さい。このことも左石獸の頭部の大きさを、右石獸よりも際立たせる原因となっている。



初寧陵左石獸造形比率



## 2) 頭部〔図2-5・6・7・8〕

正面やや上方を向いて口を開く。角は表面が風化，後頭部右側下部が欠損するが，2本残存する。左右側面ともに表面が風化するが，各部分はすべて判別可能な状態で残る。



図2-4



図2-5



図2-6



図2-9

## (1)角〔図2-5・6〕

2本の角は，両目の間に瘤状に隆起させ，その上方から後頭部まで丸彫りする。角は高く彫られ，2本の間も深く彫り分けられる。2本とも眉の先端と耳の先端あたりの位置に瘤節を作り出す。左角の後頭部先端はわずかに欠損するようであるが，頸背に角の痕跡が見られないところから，2本とも角先は現状の位置で終わっていたと考えてよいであろう。

## (2)目〔図2-5〕

〈左目〉は球体であるが，内側と上顎側を直角の二重線で区切るため，1/4の球形となる。瞼や瞳はなく，眼球のみがむき出され，上部から側面にかけてこれを眉が覆う。〈右目〉も同形であるが，風化のため，目の周囲を区切る二重線は不明瞭である。両目の間は球形に隆起させる。

## (3)眉〔図2-7・8〕

〈左眉〉は眼球の上部と左側面を包み，わずかな弧を描いて後方の耳の上にもまでのびる。眉上部の毛筋は風化のため本数は不明だが，側面には並行する4本の縄状毛筋をつくる。眉先は上方にはねるが，毛筋は集束しない。〈右眉〉も同形であるが，表面は風化のため毛筋などは判然としない。

## (4)耳〔図2-7・8〕

〈左耳〉は後方に30度程度倒した楕円形で，内部を彫り窪める。耳介に刻線は見られない。耳の先端は円形であるが，これは先端が風化したものであろう。〈右耳〉も同形である。付け根に1本の稜線をつくる。耳介に刻線は見られない。

## (5)口吻

## (a)鼻〔図2-5〕

上顎の上部中央に半円筒形を残すが，表面は風化し，右鼻孔がわずかに判別される程度である。両目の間に隆起させた球形から上顎先端まで半円筒形をのぼすが，長さは上顎の半分ほどである。

## (b)口唇〔図2-5・7・8〕

上下顎の口唇は，同じ幅の带状でひとつに繋

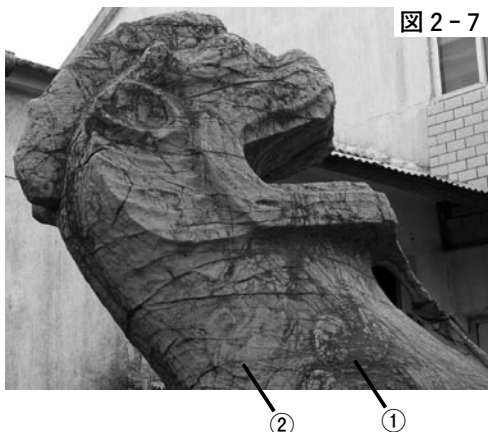


図 2-7

がる。上唇正面では、口唇の輪郭線は、両端からゆっくりした曲線で下がり、下方輪郭線のみ正面中央鼻下で上方に切れ込む。表面が風化するため明瞭ではないが、下顎正面の口唇には浅い 3 本の刻線が施されるようで、この刻線は上下顎の口唇にも続いていたようにも思われる。

#### (c) 歯〔図 2-5〕

上下顎正面の口内には、門歯の痕跡があるが風化のため 1 枚 1 枚の判別は難しい。上顎正面両端には牙の付け根痕跡が残るが、下顎正面両端は現状では確認できない。下顎門歯の上には舌先が載る。上下顎左右側面には、それぞれ牙から口端まで矩形の白歯をつくるが、表面の風化のため個々の白歯の区切り目は判別できない。

#### (6) 頬髭〔図 2-7・8〕

〈右頬髭〉は口端に 5 枚段彫りされる。その下方輪郭は下顎の付け根から発して水平に進み、ゆっくりしたカーブで耳先へと上っていく。段彫りの稜線は並行で先端へと集束はしない。

〈左頬髭〉も口端に 5 枚段彫りされるが、下方輪郭は下顎の付け根から発してすぐに耳先へと曲線を描き上っていくため、右頬髭よりも尖った形となる。段彫りの稜線は上下の一部が先端へと集束する。

#### (7) 顎髭〔図 2-5・9〕

下顎前面下部から逆三角形にのび、喉元との間を彫り抜かれ、前胸部にいたって、3 段 6 条



図 2-8

に分かれて広がる。表面および左右輪郭部が風化するため、毛筋の本数は不明。

#### (8) 頭部体表装飾

頭部に体表装飾は確認できない。

#### 3) 頸部〔図 2-7〕

〈右頸側〉には 2 本の体毛を平彫りする。ともに毛筋は刻まない。①は下顎側面前方から頸側中央辺りまでのびる。先端は後方向に反転して半 C 字形をなす。いま 1 本の②は、頬髭の下顎側面後方から頸側後方へととのびる。形は①と同形である。〈左頸側〉は表面が風化するため不明。

#### 4) 前胸部〔図 2-9〕

下顎中央からのびてきた顎髭が上下 3 段左右 6 条に分かれて広がる。表面の風化のため輪郭は判然としないが、平彫りで毛筋は刻まない。上下 3 段はいずれも左右対称で、上段が最も左右に広がり、中段、下段と広がりが狭くなる。左右 6 本の体毛は同形で、付け根から同じ太さでのび、先端は上方に反転し半 C 字形をなす。

#### 5) 脚部〔図 2-10・11〕

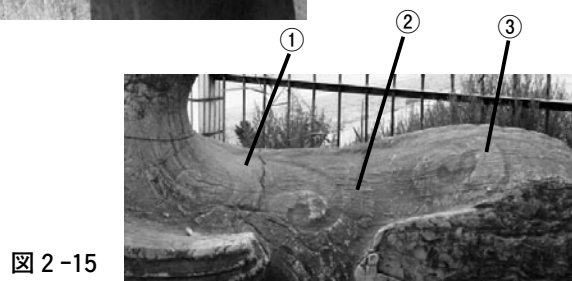
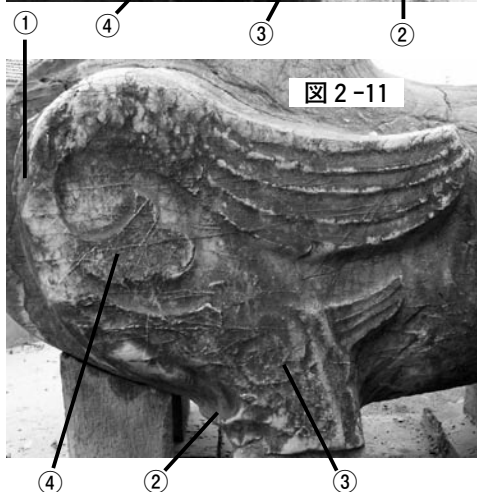
前後脚ともに右脚を前に踏み出す。左右ともに前脚は前腕部中ほどから下が欠損し、後脚は飛節上部から下が破損する。〈左右前脚〉では前腕の前方部、上腕部からの体毛が前方に反転した下に楕円形の窪みをつくるが、〈左前脚〉は楕円形の先端がわずかに残るのみである。前脚後側には左右ともに帯状に一段低く彫り込み腱を表す。

〈左前脚〉では、肘の上方に細長い3枚の段彫りにより長毛をつくる。毛先はわずかに上方にあがるが、段彫りの稜線は並行で集束しない。〈右前脚〉では、くの字形の肘の上方に長毛をつくるが、風化のため輪郭は明確ではな

い。段彫りで4本の稜線のみが残る。

#### 6) 上腕部〔図2-10・11〕

〈右上腕部〉では、幅広い帯状の体毛が肩端部輪郭を覆って前脚付け根までのび（①）、その先端は2つに分岐する。ひとは前方に短く



反り返り（②）、いまひとつは体側に沿って後方へと分岐する（③）。いずれも表面が風化するため判然としないが、③は前腕部の中央で上から下へと一回転渦を巻く。また肩端輪郭を覆う体毛①は、途中から上腕部のなかに向かって一本分岐する（④）。④は付け根が細く、先端が丸く広がり、上部にひとつ切れ込みをいれ、その先を上方に向かって小さくはねる。先端は尖る。これらの体毛は平彫りで、毛筋をまったく刻まない。

〈左上腕部〉の体毛構成も同様であるが、風化のため①の表面には欠損部分が多く、③の輪郭は判然としない。④の輪郭は残るが、付け根部分が極端に細く、先端の切れ込みも中央にあり、上方にはねる部分も小さい。

### 7) 翼〔図2-10・11〕

〈左翼〉の基部は肩口で上腕部体毛①へとつながる。基部は魚鱗状のものが彫られるが、風化のため判然としない。羽はその後方にのびる。羽の上部輪郭は緩やかな弧を描き、先端はやや上方に上がる。羽の下部輪郭の弧線は上部輪郭より大きな弧を描き羽先に上る。羽は4枚の段彫りで、上部輪郭のみは下方の細い稜線とは異なり、太い縄状線とする。羽先の先端はわずかに欠損する。各稜線は先端にいたるに従いわずかずつ集束する。〈右翼〉も同形であるが、表面は剥落して詳細は不明。

### 8) 腹部〔図2-12・13・14〕

〈左側腹〉には翼の羽下輪郭が上方にカーブしている部分より1本の体毛が発する。体毛は下方に垂れ、先端を腹側中央に向けてのぼし、毛先は一回転渦を巻く。平彫りで毛筋は刻まない。付け根部分の輪郭は風化して判然としない。〈右側腹〉も同様の体毛があるようであるが、表面の風化が進み明確にしがたい。

下腹には性器（陰茎）をつくる。

### 9) 背部〔図2-15〕

脊柱を構成する椎骨が楕円形に盛り上げられ連続する。左側面には、椎骨から、頸付け根発より羽上に1本（①）、側腹上部に1本（②）、大腿部上部に1本（③）の計3本がのびる。い

ずれも付け根より毛先まで同じ太さで、毛先は前方に向かって反転し、一回転渦を巻く。3本とも平彫りで毛筋は刻まない。右側面も同様と思われるが、表面の風化のため判然としない。

### 10) 大腿部〔図2-16・17〕

左右ともに風化のため判然としないが、〈右大腿部〉中央には巻毛の痕跡が見られる。

### 11) 臀部〔図2-18〕

楕円形の椎骨と、それより左右にのびる数本の体毛の痕跡があるが、表面の風化が進展しているため詳細は明確にしがたい。

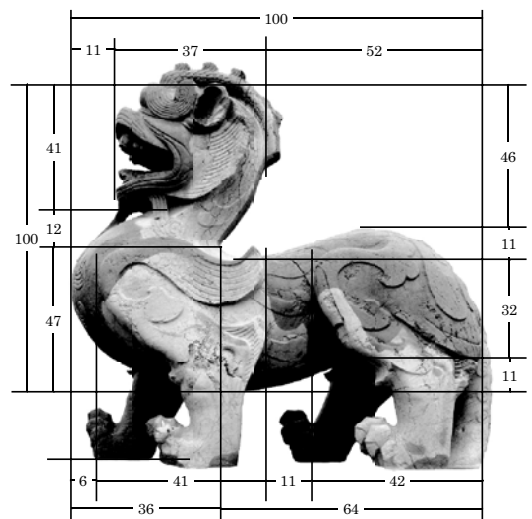
### 12) 尾〔図2-18〕

尾は臀部下部より下を欠損する。椎骨や体毛は残らない。

## 3. 獅子衝右石獸

### 1) 体軀（プロポーション）〔図3-1・2・3・4〕

体長3.19m、高さ3.13m。④グループの造形比率は(a)初寧陵石獸、(b)獅子衝・陵口・三城巷南石獸、(c)三城巷石獸の3つのタイプに分けられる。(a)初寧陵石獸は体軀の各部分が未分化であったが、(b)の一群では頭部・胸部・胴部・臀部・脚部を明確に分化させ、それぞれのバランスを考えて造形化するようになる。そうした(b)群のなかで、獅子衝石獸の特徴は頭部が大きい、いわゆる頭でっかちな印象を与えることで



獅子衝右石獸造形比率（左右反転）

ある。造形比率(表2参照)をみると、⑫面幅〈顎前一面奥〉37は陵口石獸37・三城南石獸36と変わらないが、①面長〈頭頂一顎下〉においては、陵口・三城巷南が39に対し、獅子衝では41と長く、また②頸長〈顎下一顎下〉では陵口・三城巷南が14に対し、獅子衝では12と頸が短い。すなわち頸が短いため、面長がより大きく印象される。これに加え、⑮翼幅〈翼前一翼後〉が陵口・三条巷(44~47)であるのに対し、41と短い。すなわち獅子衝石獸では、頭部の大きさに比べ、翼幅が短いため、実際以上に頭部が大きい印象を与えるのである。また、⑪〈胸前一顎前〉は陵口・三城巷南が9に対し、11と長く、⑭〈面奥一尻奥〉では、陵口・三条巷南が(54~55)であるのに対し、52と短い。これは陵口・三城巷南石獸と比較し、獅子衝石獸の頭部全体が後方にあるということで、さらにこれに加えて四脚が太く短いため、より頭部を大きく印象させることになる。



図 3-1



図 3-4



図 3-2



図 3-3

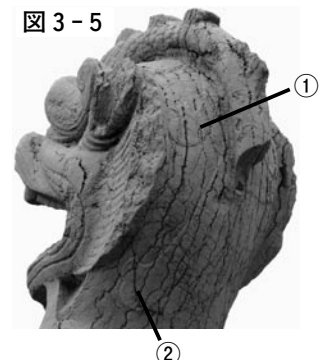


図 3-5

## 2) 頭部〔図3-4・5・6・7〕

正面上方を向いて口を開く。頭部中央に1本の角をつくる。角の後頭部先端は欠損する。左右頬髭輪郭部先端、左耳先端半分为欠損する以外は完全な状況で残る。

### (1)角〔図3-5・6・7〕

頭部中央に一角をつくる。角は円筒形に彫出され、頭部に接地する部分の彫り込みは深い。両目の間の隆起部の上から後頭部までのびて先端が破損する。先端がどこまでのびていたのかは不明であるが、頸背部には角の痕跡は見られない。角の上面には、前半分の頭頂にいたるまでに三つの隆起部、後頭部に下ったところにふた山の隆起部がある。ふた山の隆起部は先端が破損したものに見えるが、前半分の三つの隆起部については、その先が折れたものか、当初より現状のままかは未確認。両目の間から立ち上がった部分は第一隆起部まで線を刻むが、第三隆起部までの間は表面を魚鱗状に刻む。

### (2)目〔図3-4〕

両目は大きな球状で、両目の間の瘤と合わせて、ほぼ同じ大きさの球体を三つ並べた形となる。両目に瞼や瞳はなく、眼球のみがむき出され、上部から側面にかけてこれを眉が覆っている。

### (3)眉〔図3-6・7〕

〈右眉〉は完全な形で残る。眉は眼球の上部と右側面を包み、U字曲線を描いて耳の前までのび、先端は反転する。反転部分は分離するのではなく、眉の中に巻き込む。表面は上方より7枚の段状にして毛筋を表し、反転部分の先端は三重の渦巻きとする。〈左眉〉も右眉と同形

であるが、上半分の表面が風化し輪郭が失われ、表面段状の毛筋も下方数条を除いて判別できなくなっている。

#### （4）耳〔図3-6・7〕

〈右耳〉は後方45度に倒した楕円形で、基部を二段に彫出す。内部を彫り窪め、後方部には中心より輪郭部に繋がる3本の稜線を彫り出す。〈左耳〉も同形であるが、上半分の輪郭部が破損している。

#### （5）口吻

##### （a）鼻〔図3-4〕

鼻は上顎の中央で富士山形に隆起する。鼻先は上顎の先端と同一面にあり、底部は口唇に埋まり、そこに大きめの円形の鼻孔をふたつ穿つ。鼻梁は両眼の中央に続く。

##### （b）口唇〔図3-4・6・7〕

口唇はひと続きではなく、上顎と下顎でふたつに分かれる。下顎口唇は、左右側面において、上顎口唇の上に被さるような形となり、その先端は眼下の鼻梁へと伸びる。上顎口唇は鼻の左右で隆起しており、4段の段状をなす。下部輪郭線は、両端からゆっくりした曲線で下がり、鼻下正面中央で上方に切れ込む。下顎口唇内には上下2本の平行線が刻まれ、左右眼下より口の周囲を連続してめぐっているが、下線は正面中央で切れ、左右線の先端はC字形に反転し向き合う。

##### （c）歯〔図3-4・6・7〕

上顎の口内の門歯は4本、その両端に太い牙を1本ずつ彫るが、先端が欠損し付け根部分のみが残る。いずれも歯茎を線刻する。下顎の門

歯4本は上顎門歯よりも小さく、その上に舌が乗せられる。舌先の先端は口から垂れるのではなく、口内におさまる。下顎の両牙は付け根の痕跡を残すのみ。上下顎の左右臼歯はいずれも5本並ぶが、歯茎の線刻は見られない。左側下顎の臼歯5本は風化のため輪郭が不明瞭になっている。

#### （6）頬髭〔図3-6・7〕

〈右頬髭〉は右下顎口唇の後方に16枚の段状につくられる。その下端は下顎の付け根から発し、上端は耳の付け根から発する。先端は上方へとカーブする。〈左頬髭〉も同形であるが、15枚の段状につくられる。付け根部分の線刻が風化し、先端部分が欠損する。

#### （7）顎髭〔図3-4・8〕

下顎前面と左右側面の3ヶ所から分かれて生えだす。前面のものは下顎から逆三角形にしばらく、喉元との間を彫り抜かれ、前胸部にいたって3段5条に分かれて広がる。右側面のものは、下顎から彫り抜かれて先端部分が頸側に浮彫される。先端は分離して反転するのではなく、渦状に巻き込む。3本の刻線で毛筋を表す。左側面も同形と思われるが、表面が風化して刻線や輪郭は明瞭ではない。

#### （8）頭部体毛〔図3-5〕

後頭部には角と頬髭の間に、左右とも2ヶ所ずつ体毛が表される。上方の体毛（①）は短く、第3瘤の下あたりからでて頬髭上辺あたりまで下がる。下方の体毛（②）は長く、後頭部の角が欠損した箇所の下からでて頬髭の下あた

図3-8



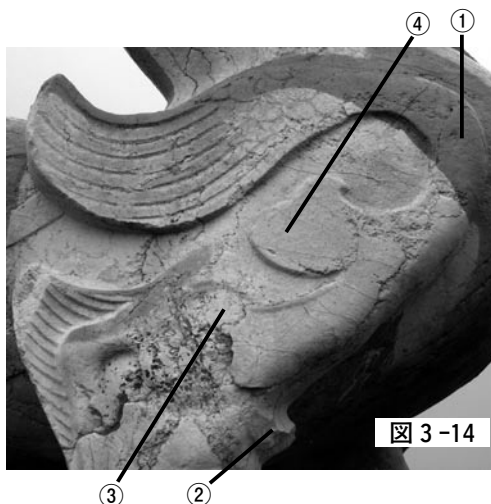
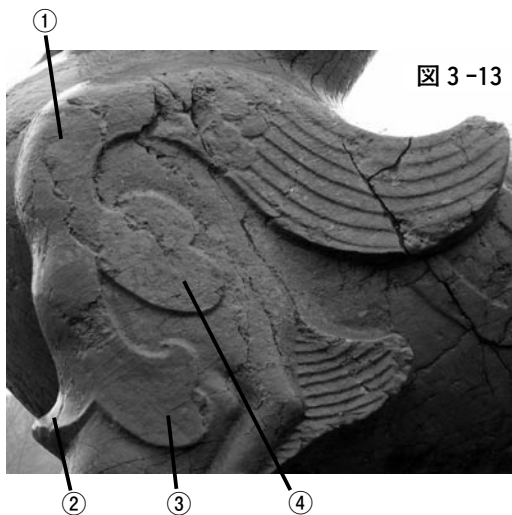
図3-6



図3-7







りまで下がる。いずれも体毛全体をひとつの平彫りとして、内部に刻線による毛筋は表さない。〈左側〉上下いずれの体毛も、先端は上方にわずかに反転し、反転部分と体毛本体との間にひとつの小さな切れ目をつくる。〈右側〉も同形であろうが、上方の体毛は先端の形が不明。下方の体毛は先端の切れ込み部分が、切れ込みか欠損か判断し難い。

### 3) 頸部〔図 3-6・7〕

顎下から頸付け根までは短く、この間の頸側には頭部体毛②の先端がのびてくる。

### 4) 前胸部〔図 3-8〕

下顎中央からのびてきた顎髭が上下3段左右5条に分かれて広がる。上2段は左右相称で、最下段は1本だけが向かって右方向にのびる。最上段2本は、向かって左が3本の刻線、右は5本の刻線で毛筋を表す。先端はわずかに反転し半C字形となる。中段左右2本および下段1本は、いずれも4本の刻線で毛筋を表す。先端は反転するが分離せず、渦状に巻き込む。

### 5) 脚部〔図 3-9・10・11・12〕

前後脚ともに左脚を前に踏み出す。四脚ともつま先を上げ、指は5本、先端に爪をつくる。中指を一番高くして、左右2本を順次低くしていく。

〈左前後脚〉では脚の後側に、肘部を頂点として、逆くの字形に付け根から踵にいたる太い腿を隆起させる。〈右前後脚〉も同様であるが、左脚ほど明瞭ではない。これは左脚が前に踏み出されている動勢を考慮したものかとも思われる。

〈左右前脚〉の肘後には三角形の長毛をつくる。左脚長毛は13段、右脚長毛は14段の段彫りで、いずれも毛筋は並行線となる。先端は左が30度、右が45度程度に上方へとね上がる。〈左右後脚〉では、肘と臀部下方輪郭との間に前脚と同じく三角形の長毛が刻まれる。左後脚長毛は11段の段彫りで、左脚が踏み出され臀部との間に余裕があるため先端が三角形にのびる。右後脚長毛は十分な余地がないため、先端が短く8段の段彫りとなる。さらに先端は風化して毛筋が明確ではない。



## 6) 上腕部〔図3-13・14〕

〈左上腕部〉では、幅広い帯状の体毛が肩端部輪郭を覆って前脚付け根までのび（①）、その先端は2つに分岐する。ひとつは前方に短く反り返り（②）、いまひとつは体側に沿って後方へと分岐する（③）。また肩端輪郭を覆う体毛①は、途中から上腕部のなかに向かって一本分岐する（④）。これらの体毛は平彫りで、毛筋をまったく刻まない。分岐した③④の先端は幅が広く、輪郭は真中にひとつ切れ目を入れてふたつに分かれる。上方の先端は肩端に向かって半C字形に小さく反転する。〈右上腕部〉の体毛も同形であるが、前脚付け根で分岐する②③が損壊している。

## 7) 翼〔図3-15・16〕

〈左翼〉の基部は肩口で上腕部体毛①につながる。基部は半円形を魚鱗のように交互に2・2・3・3枚と4列重ねた形状であるが、前2列は破損しているため明確ではない。羽は4列目の半円形から8段の段彫りで後方にのびる。羽の上部輪郭は凹みが深く先端がはね上がる。羽の下部輪郭の弧線は勢いのあるカーブで先端に上る。各段の稜線は並行線となり、先端で集束しない。〈右翼〉も同形であるが、基部の半

円形は魚鱗状に3・2・3・2枚と4列並び、羽の先端は左羽よりも強く上方に反り返る。

## 8) 腹部〔図3-17・18・19〕

〈右側腹〉には羽の先端から1本、羽下が上方にカーブするところから1本、長毛下から1本、計3本の体毛が大腿部に向かってのびる。いずれも先端は上方に反転して半C字形をなす。3本とも平彫りで、毛筋を刻まない。羽の先端からでる一番上の体毛の輪郭は風化のため明瞭ではない。

〈左側腹〉にも3本の同形の体毛があるが、右側腹で長毛下からでていた一番下の体毛は、長毛からではなく、羽の下からでる。左側腹の体毛3本は風化のため輪郭が判然としない部分が多いが、最下段のものは反転させた先端を半C字形にせず、いわゆる蕨手形に丸める。

下腹には性器（陰囊・陰茎・亀頭）をつくる。

## 9) 背部

脊柱を構成する椎骨が花卉形に盛り上げられ連続する。背部の体表装飾に関しては未確認。

## 10) 大腿部〔図3-20・21〕

〈左大腿部〉の輪郭部は、幅広い帯状体毛（①）で覆われる。①の上端は臀部へいたる部分で先端が3つに分かれる（②）。中央の毛先は丸く

図3-15

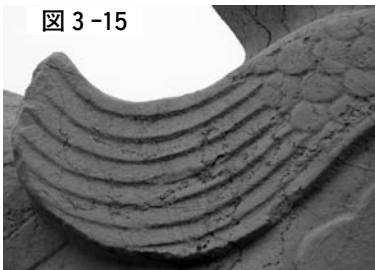


図3-16

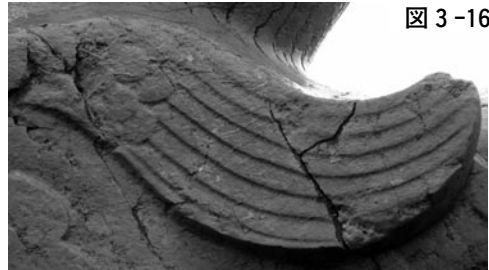


図3-17

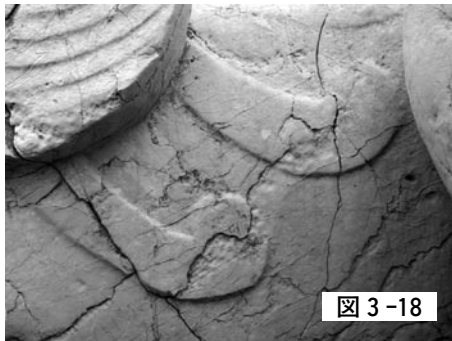


図3-18



図3-19

残し、上下を反転させ半Ｃ字形とする。①の下端は下腿部で、ひとは前方に短く反り返り（③）、いまひとは体側に沿って後方へと分岐する（④）。また①は②と③の間で大腿部のなかに向かって一本分岐する（⑤）。④と⑤は同形で、先端は幅が広く、輪郭は真中にひとつ切れ目を入れてふたつに分かれる。上方の先端は前方に向かって半Ｃ字形に小さく反転する。いずれの体毛も単純な平彫りで毛筋は刻まれていない。〈右大腿部〉も同様の体毛構成となる。

#### 11) 臀部〔図 3-22・23〕

〈左臀部〉では、花卉形の椎骨を連ねた脊柱部分より、臀部中央に太く長い体毛①が垂れ下がる。その先端は後方側で切れ目がはいって２分されるが、これは基本の体毛①に反転する半Ｃ字形③を付加したものであろう。①の付け根には、隣の体毛との間に小さな渦巻き④をつくる。臀部中央の体毛①の後隣には、①の半分程度の長さの体毛②が彫出される。この体毛の形

も①と同じである。ただし先端の部分が①よりも小さくなっただけ、上方に反転する半Ｃ字形⑤との組合せ感が強くなり、ひとつの単位文様のように見える。しかし左隣の①と見比べれば、あくまで半Ｃ字形⑤は体毛②に付加されたものであることがわかる。①と②いずれの体毛も平彫りで毛筋は刻まない。体毛②の下方には、尾椎に沿って２回転の渦を巻く体毛⑥と⑦が連続する。⑦のあたりが臀部の下端となるが、これより〈左大腿部〉体毛３本の真中あたりまで、甲羅を背負ったように区切られ、その内側に刻線が１本刻まれる。〈右臀部〉も同様の構成である。腰の最後部より臀部下端までの花卉状椎骨は６個。

#### 12) 尾〔図 3-24〕

尾は先端が右側に曲がるくの字形に垂れ、台座に着いて左方向に半回転の渦を巻く。臀部下端よりの花卉状椎骨は６個。この左側に２回転の渦を巻く体毛が４本、右側に３本彫られる。

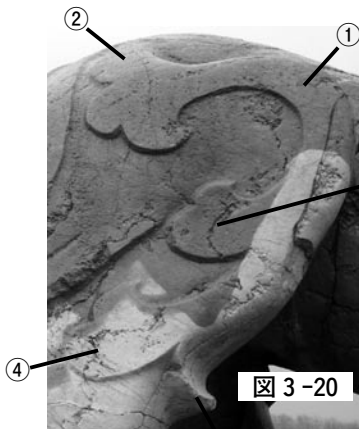


図 3-20

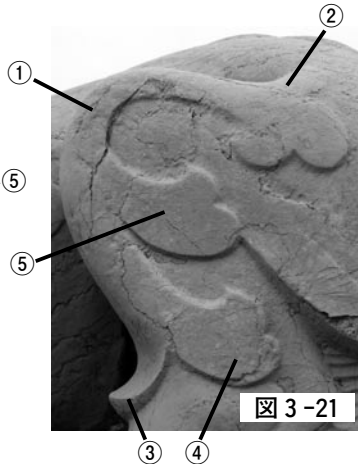


図 3-21



図 3-24

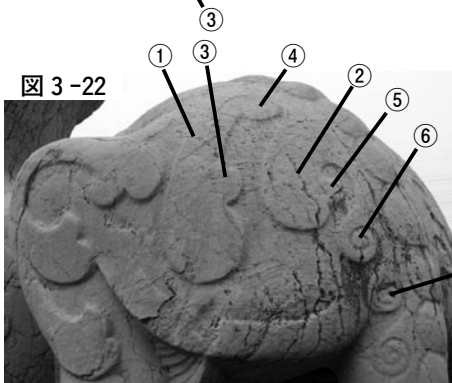


図 3-22

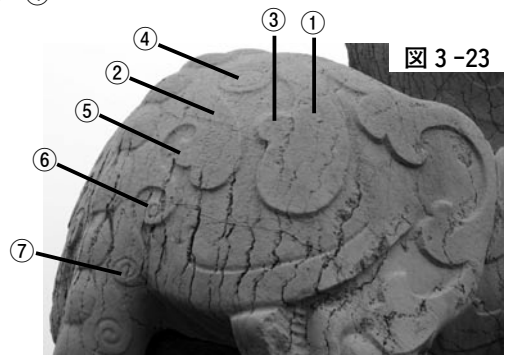


図 3-23

#### 4. 獅子衝左石獸

##### 1) 体軀（プロポーション）〔図4-1・2・3・4〕

体長3.11m, 高さ3.00m。右石獸で述べたプロポーションの項と同様である。

##### 2) 頭部〔図4-5・6・7・8〕

正面やや上方を向いて口を開く。頭部に2本の角をつくるが、両角とも後頭部先端を欠損する。頭部は下顎奥から頸背にかけて破損分離したが、1977年に復原修理された。左右頬髭上部、左右耳先端欠損。右眉先端から右後頭部側面を破損する。

##### (1)角〔図4-5・6・7・8〕

頭頂、両目の上より耳先辺りまで、円筒形の2本の角が残る。いずれの角先も欠損するため、角の先端がどこまでのびていたのかは不明であるが、角の痕跡は後頭部中ほどまで残る。残された角の表面は魚鱗状に小さな粒を刻み、

角の上部にはふたつの隆起部分が見られる。両角の正面から側面前方にかけて帯状区画をつくり、その中には、縦に4本ほどの並行刻線をいれる。

##### (2)目〔図4-5〕

両目は大きな球状で、両目の間の瘤と合わせて、ほぼ同じ大きさの球体を三つ並べた形となる。両目に瞼や瞳はなく、眼球のみがむき出され、上部から側面にかけてこれを眉が覆っている。右目表面は一部が欠損する。

##### (3)眉〔図4-7・8〕

〈左眉〉は完存する。眉は眼球の上部と右側面を包み、U字曲線を描いて耳の前までのびる。並行する8枚の段彫りで毛筋を表し、眉先の上部表面には3重の渦巻きをつくる。〈左眉〉も右眉と同形であるが、風化のため上部輪郭と毛筋が明確ではなく、先端部分は欠損する。



図4-1



図4-2



図4-5



図4-6



図4-3



図4-4

## (4)耳〔図4-7・8〕

〈右耳〉は先端が欠損するが、後方45度に倒した楕円形で、基部を2段に彫出し、内部を彫り窪める。耳介内には線刻は見られない。〈左耳〉も同形であるが、先端を欠損し、基部と耳穴、わずかな輪郭を残すのみである。耳介内には、耳穴の中心より後方に向かって2本の稜線を彫り出しているようである。

## (5)口吻

## (a)鼻〔図4-5〕

鼻先は上顎の先端と同一面にあり、上顎の中央で半円筒形に高く隆起する。鼻の底部は上顎口唇に埋まる形で、そこに大きめの円形の鼻孔をふたつ穿つ。鼻梁は両眼の中央に続く。

## (b)口唇〔図4-5・7・8〕

左右側面ともに下顎奥の口端部分が破損し、復元されているが、上下顎の口唇はひと続きではなく、上顎と下顎でふたつに分かれる。下顎口唇は、上顎口唇の上に被さるような形となり、その先端は眼下の鼻梁へと伸びる。上顎正面の口唇は鼻の左右で隆起しており、下部輪郭線は、両端からゆるい弧を描き、鼻下正面中央で上方に切れ込む。口唇内には4本の刻線を施し、そのうち下方3本は側面へと続く。下顎口唇内には上下2本の平行線が刻まれ、左右眼下より口の周囲を連続してめぐっているが、下線は正面中央で切れ、左右線の先端はC字形に上方に反転し向き合う。

## (c)歯〔図4-5・7・8〕

上顎の口内に門歯を彫るが、亀裂、風化のため、本数ははっきりしない。その両端に牙を1

本ずつ彫るが、右は先端が欠損し付け根部分のみが残り、左は付け根部分から破損する。下顎の門歯も本数は明確でないが、刻線で歯茎を表す。下顎の牙は付け根部分の痕跡も判然としなない。門歯の上には舌が載せられるが、破損しわずかに痕跡を残すのみである。上下顎の左右には臼歯を彫出するが、上顎右側に4本確認できる以外は、風化のため本数は明確にできない。

## (6)頬髭〔図4-7・8〕

左右とも頬髭は破損し、耳下部にわずかに数条の毛筋が見られるのみである。

## (7)顎髭〔図4-5・9〕

下顎前面と左右側面の3ヶ所から分かれて生えだす。前面のものは下顎から逆三角形にのび、喉元との間を彫り抜かれ、前胸部にいたって3段5条に分かれて広がる。逆三角形にのびる部分は破損分離した部分を補修により接着される。左側面のものは、下顎から彫り抜かれて先端部分が肩口に浮彫されるが、現状は彫り抜かれた部分が補修のセメントで埋められる。先端は分離して反転するのではなく、渦状に巻き込む。刻線で毛筋を表す。右側面の顎髭は、下顎に基部の痕跡、肩口にかすかに髭先の渦状巻き込み部分が残る。

## (8)頭部体表装飾

頭部の体表装飾は、表面の風化により確認できない。

## 3) 頸部〔図4-7・8〕

頸側から頸背部分は損壊し、セメントにより復元されているため、体表装飾は確認できない。

図4-7 図4-8



図4-9



#### 4) 前胸部〔図4-9〕

下顎中央からのびてきた顎髭が上下3段左右5条に分かれて広がる。最下段は分岐せず、1本だけが左側面方向にのびる。右側面方向の上段と中段は、浅く太い刻線で5本の縄状毛筋をつくる。毛先は上方に反転して2重に渦を巻く。上段の毛先は基部から分離せず、渦巻き部分を毛筋の中に巻き込む。中段の毛先も分離しないが、基部の毛筋に巻き込むのではなく密着する。最下段の毛先は上方に反転して2重に渦を巻き、渦巻き部分を毛筋の中に巻き込む。左側面方向の上段、中段は、ともに分岐した部分から先の輪郭と毛筋が剥落する。

#### 5) 脚部〔図4-10・11・12・13〕

前後脚ともに右脚を前に踏み出す。四脚ともつま先を上げ、指は5本、先端に爪をつくるが、右後脚以外の爪は欠損する。中指を一番高くして、左右2本を順次低くしていく。〈左右前脚〉では肘部を頂点として、〈左右後脚〉では飛節を頂点として、脚の後方部分を付け根から踵へと、くの字形に隆起させて腱を表す。

〈右前脚〉では肘より上方に、〈左前脚〉では肘をはさんで三角形の長毛をつくる。右前脚長毛は10枚、左前脚長毛は13枚の段彫りで、いずれも並行に毛筋をつくるが、先端表面は剥落する。〈左右後脚〉では、肘と臀部下方輪郭との間に三角形の長毛をつくる。〈右後脚〉長毛は11枚の段彫りで、右脚が踏み出され臀部との間に余裕があるため先端が三角形にのびる。〈左後脚〉長毛は十分な余地がないため、先端が短く、9枚の段彫りとなる。

#### 6) 上腕部〔図4-14・15〕

〈右上腕部〉では、幅広い帯状の体毛が肩端部輪郭を覆って前脚付け根までのび（①）、その先端は2つに分岐する。ひとつは前方に短く反り返り（②）、いまひとつは体側に沿って後方へと分岐する（③）。また肩端輪郭を覆う体毛①は、途中から上腕部のなかに向かって一本分岐する（④）。これらの体毛は平彫りで、毛筋をまったく刻まない。分岐した③④の先端は幅が広く、輪郭は真中にひとつ切れ目を入れて

ふたつに分かれる。上方の先端は肩端に向かって半C字形に小さく反転する。〈左上腕部〉の体毛構成も同様であるが、〈右上腕部〉に比べ、③④の体毛は短く幅が広い。

#### 7) 翼〔図4-16・17〕

〈左翼〉の基部は肩口で上腕部体毛①につながる。基部は半円形や円形を15枚ほど魚鱗状に



図4-10



図4-13



図4-12



図4-14

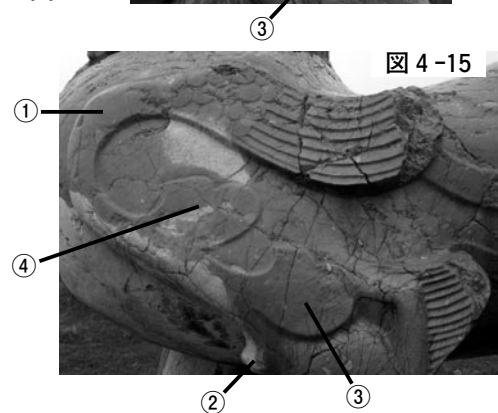


図4-15

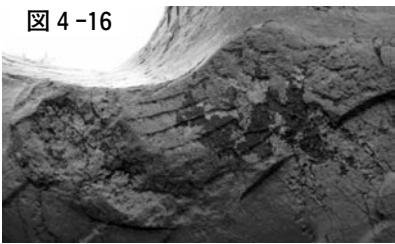


図 4-16

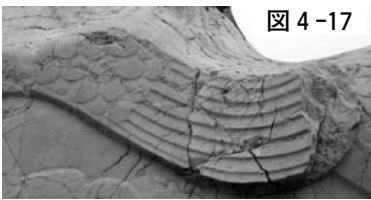


図 4-17

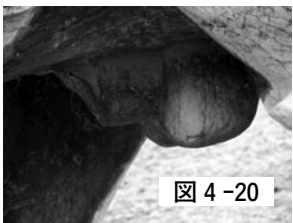


図 4-20

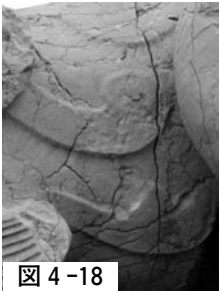


図 4-18

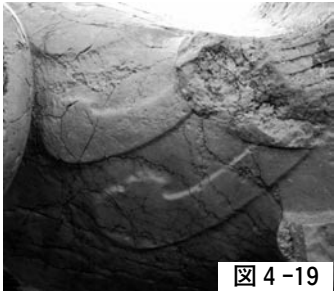


図 4-19



図 4-25



図 4-21

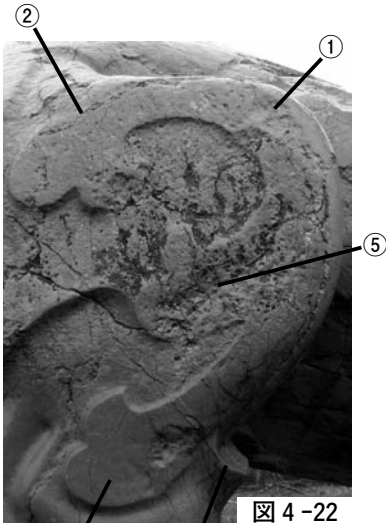


図 4-22



図 4-26

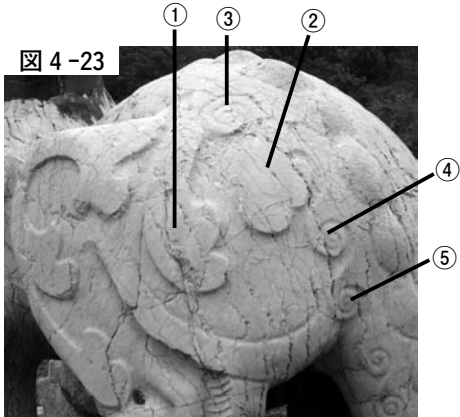


図 4-23

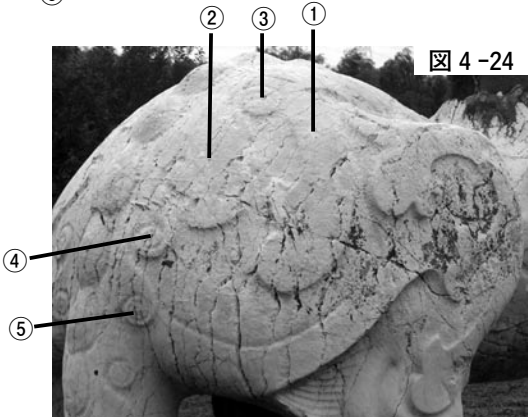


図 4-24

並べるが、風化や剥落のため列や枚数は明確にし難い。羽は基部右端より８枚の段彫りで後方にのびる。翼の幅は広くなく、基部と同じ幅で続く。上部と下部の輪郭はほぼ同じ緩い弧線を描いて羽先へと上る。先端が欠損するため、先端の稜線、輪郭は不明。

〈右翼〉も同形であるが、羽の中ほどをのぞいて、基部や先端の表面が風化、剥落するため、詳細は判然としない。

#### 8) 腹部〔図4-18・19・20〕

〈左側腹〉には、羽下の輪郭が上方にカーブするところから１本、長毛先端から１本、計２本の体毛が大腿部に向かってのびる。いずれも風化のため、先端部の輪郭が明瞭ではないが、平彫りで、毛筋を刻まない。毛先は上方に反転し、真中にひとつ切れ目を入れてふたつに分かれる。

〈右側腹〉にも２本の体毛をつくるが、左側腹で長毛先端からでいた下方の体毛は、長毛からではなく、羽の下からでる。いずれも毛先はひとつ切れ目を入れてふたつに分かれ、上方の先端は肩端に向かって半Ｃ字形に小さく反転する。ともに平彫りで、毛筋を刻まない。

下腹には性器（陰囊・陰茎）をつくるが、陰茎の先端は欠損する。

#### 9) 背部

脊柱を構成する椎骨が花卉形に盛り上げられ連続する。背部の体表装飾に関しては、脊柱より左右に体毛が発するようであるが、本調査では確認できていない。

#### 10) 大腿部〔図4-21・22〕

〈左大腿部〉の輪郭部は、幅広い帯状体毛（①）で覆われる。①の上端は臀部へいたる部分で先端が３つに分かれる（②）。中央の毛先は丸く残し、上下は反転させ、先端は小さな半Ｃ字形となる。①の下端は下腿部で、ひとつは前方に短く反り返り（③）、いまひとつは体側に沿って後方へと分岐する（④）。また①は②と③の間で大腿部のなかに向かって一本分岐する（⑤）。④と⑤は同形で、先端は幅が広く、輪郭は真中にひとつ切れ目を入れてふたつに分

かれる。上方の先端は前方に向かって半Ｃ字形に小さく反転する。いずれの体毛も単純な平彫りで毛筋は刻まれていない。

〈右大腿部〉も同様の体毛構成であるが、②の体毛の反転分岐させた上下部分の輪郭は剥落のためはっきりしない。①の下端は下腿部で、ひとつは前方に短く反り返り（③）、いまひとつは体側に沿って後方へと分岐する（④）。④の体毛先端は幅が広く、輪郭は真中にひとつ切れ目を入れてふたつに分かれる。上方の先端は前方に向かって半Ｃ字形に小さく反転する。⑤の体毛も同形であろうが、剥落のため輪郭は明確ではない。いずれの体毛も単純な平彫りで毛筋は刻まれていない。

#### 11) 臀部〔図4-23・24・25〕

〈左臀部〉では、花卉形の椎骨を連ねた脊柱部分より、臀部中央に太く長い体毛①が垂れ下がる。その毛先は後方側で切れ目がはいって２分される。上方の先端は上に向かって小さな半Ｃ字形をつくる。臀部中央の体毛①の後隣には、①と同形で半分ほどの長さの体毛②が彫出される。①と②いずれの体毛も平彫りで毛筋は刻まない。①の付け根には、体毛②との間に、②の輪郭線がのびて２重に渦を巻いた体毛③をつくる。体毛②の下方には、尾椎に沿って２重の渦を巻く体毛④と⑤が連続する。⑤のあたりが臀部の下端となるが、これより〈左大腿部〉体毛②の下方あたりまで、甲羅を背負ったように区切られ、その内側に刻線が１本刻まれる。〈右臀部〉も同様の体毛構成であるが、体毛②は風化により輪郭が判然としない。腰の最頂部より臀部下端までの花卉状椎骨は６個を数える。

#### 12) 尾〔図4-26〕

尾は先端が左側に曲がりながら垂れ、基壇について右方向に半回転の渦を巻く。花卉状椎骨は尾が基壇につく部分まで６個がつくられる。この尾骨の左右には、下方に向かって２回転する渦巻き状体毛が５本連続する。

（以下次稿）

〔付 記〕

本調査は平成16～17年度科学研究費補助金基盤研究 C「魏晋南北朝時代の環東海地域における南朝文化伝播の諸相と伝播経路に関する基礎研究」（課題番号16520431）により行ったものである。なお本調査報告書の作成にあたっては、多量の画像データの整理および画像修正作業等、

多方面にわたって阪南大学国際コミュニケーション学部2002年度生有光恵梨君に協力して頂いた。これら煩雑な作業に労を厭わなかった同君に厚く御礼を申し上げたい。

（2006年10月3日受付）